

添う看護

私にはダウン症候群の息子がいます。27歳での2人目の出産だったので、1人目同様問題なく生まれてくると信じていました。しかし、出生2週間で「ダウン症候群です」と告知され、それからの1か月は目が覚めている間はずっと泣いていました。「実は検査結果は間違いでした。」「ダウン症は治る障害になりました」と誰かが言ってはくれないかと自分に都合のいい妄想ばかりして現実から逃げていました。今思えば自分勝手な親だったと思います。

そんな状態でも1600gで生まれた息子に母乳を飲ませる練習をさせるため毎日病院に電車で通っていました。正直、息子のためではなく「模範的な母」と思われたい自分のために通っていました。それでも涙は止まらないので、春先なのをいいことに大きめのマスクで顔のほとんどを覆い隠し、NICUへ通う日々です。こんな異様な姿の、泣き続ける母親の私にNICUの看護師さんは顔色ひとつ変えず笑顔で「今日、すごく元気ですよ」とか「チューブ1っこ取れましたよ」とか「男の子なので、チューブ固定のテープにはアンパンマン書きました」などの明るい報告だけで接してくださいました。泣いている私の真っ赤な目に言及する看護師の方は誰も居なかったのを鮮明に覚えています。今思えば、この時の私は泣いていることを必死に隠そうとしていたので、きっとその気持ちを汲んでの看護師さん達の対応だったのだろうと思います。目も鼻も真っ赤なまま息子に会いに行っていたので全然隠せてはいなかったと思いますが…。

いよいよ、2500gまで成長した息子の退院が決まった日。一人の助産師さんが私に「いつまで泣いてるん？この子が生まれたときうれしかったんやろ？なら、その気持ちを大事にし」と初めて私の涙に言及されました。恥ずかしい事ですがその時まで私は息子に障害があるという事実打ちひしがれていて「息子が生まれた時の喜び」を忘れていたんです。「はい。嬉しかったです。」と言いながら号泣する私の背中を助産師さんはずっと擦ってくれていました。その手がどれだけ心強かったことか。

その助産師さんの言葉で、「生まれたときの喜び」を思い出してからは息子の少しずつの成長一つ一つが可愛くて、愛しくてやっと母になれた気がしました。

これからの医療現場は、出生前診断や出生前治療。遺伝子治療など日進月歩で発展していくと思います。でも障害を持った子どもの親や兄弟や親族の気持ちに寄り添えるのは医療の発展ではなく、横に居て背中を擦れる看護師・助産師だと私は知っています。

温かい、強い手を持った看護師・助産師になれるように一生懸命学ぼうと思います。そしていつか当時のお世話になった助産師さんに助産師としてお会いするのが今の私の夢です。